

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp

### 「長期と短期の意思決定」

研究科長 藤川 清史

われわれは長期と短期の対策の両方を考えます。例えば、体調不良の際は栄養をしっかりとって安静にするのが(短期には)健康に良いが、通常時は腹八分目にして運動を継続するのが(長期には)健康に良いと、多くの人が考えます。

一国の政策も多くの事柄を長期と短期の効果の両方を考えねばなりません。今日話題の年金財政も然りです。長期的な年金財源を確保するには国民負担を上げざるを得ないのですが、それが短期的には総需要を減少させるというマイナスの側面もあります。政府は難しい舵取りを迫られています。

教育支出もまた然りであります。教育は「外部経済」の典型例であります。通常の財・サービスの取引では、その便益は取引当事者の間だけに限られますが、「外部経済」があるとは、取引当事者以外の人々に便益が及ぶということでもあります。つまり、教育によって知識や技能をもった人々の割合が長期的に増えれば、その一国の生産性が上昇することで、その便益が国民全体に及ぶということです。だから多くの国は、税金で教育を支援しているわけです。しかし、従来の日本政府の方針では、長期的要請の教育よりは短期要請の高齢者医療などが優先でした。OECDの教育指標によると、「公的な」教育支出の対GDP比率(2008年)は、トップがノルウェーの7.3%、次いでアイスランドの7.2%、OECD平均では5.0%でした。日本はOECD最下位の31位で3.3%でした。天然資源のない日本では、人的資源のみが生産性の源泉なのですが、長期的には厳しい数字であります。

さて、2011年の東日本大震災は、いくつかの側面で、あらためて短期と長期を考慮することの重要性を教えてくださいました。そのひとつが、エネルギー政策です。原子力発電は発電コストが安いという触れ込みで、日本は原子力発電を推進してきました。しかし、原子力は長期的には高くつくことが明らかになりました。原子力発電は化石燃料から自然エネルギーへの引継ぎのワンポイント・リリースだと考えるほうが良かったようです。今後は、短期では原子力や火力の効率改善、長期には太陽光や風力の自然エネルギーの安定利用への移行を目指すのだと思います。

もうひとつの例は、開発途上国に対する支援(ODA)です。名古屋

大学大学院国際開発研究科は1991年に発足しましたが、その当時の日本経済は調子が良く、国際社会に先進国であることをアピールしたかったこともあり、日本のODAがアメリカを抜き世界1位になっていた頃です。折りしも中東で湾岸戦争が起り、「国際貢献」が流行語にもなりました。しかし、今から考えれば、この時のODAの増額は長期的な戦略を持ったものではなかったのでしょうか。「盛者必衰の理」よろしく1990年代以降の日本の経済力はジリ貧になり、ODAも萎んでいきました。しかし驚いたことに、東日本大震災では、日本が支援した多くの開発途上国から震災復興のための支援の申し出がありました。これを機にODAが見直されることになったのです。

少々古い話ですが、2006年に(当時の)麻生太郎外務大臣が「ODA・情けは人のためならず」と題するスピーチをしています。そのなかで麻生氏は「国民から預かった大事なお金を、一度よそ様に使って頂き、その結果をおいおい自分たちの役に立てようという話ですから、考えてみればODAくらい腰の据わった戦略を必要とするものもざらにはありません。」と述べています。実際麻生氏の「予言」は的中したわけですし、ODAの効果は長期で考えるべきで、最終的には国益につながるのだという意見はその通りだと思います。

教育予算とODAの削減の中でありながら、国際開発研究科は、落ちぶれて色あせる「沙羅双樹の花の色」ではありませんでした。20年間の長期にわたる人材養成の努力は、東南アジアを中心に胸を張れる成果を出しております。現在、政府やNGOに加え、民間部門を含む多くの開発関係者を人材養成の対象に含めようとする教育プロジェクトも進行中です(大学の世界展開力強化事業)。在籍年数が5年と浅い身で生意気を言いますが、国際開発研究科は、名古屋大学のテーマである「勇気ある知識人」の養成に長期的に最も貢献しうる部局のひとつではないのかと想ったりしています。



## JICA 研修

## 「アジア地域産業振興(一村一品運動)(B)/ ベトナム国 道の駅の地域振興機能強化」を実施

教授 西川 芳昭

GSIDでは、JICA九州より委託を受け、2010年度より研修事業「ベトナム国 道の駅の地域振興機能強化」を実施しています(3カ年計画。最終年にあたる本年度は、10月に実施予定。コースリーダー：西川芳昭)。

ベトナム国では、過去JICAにより実施された「ベトナム国道の駅マスタープラン策定調査」を踏まえ、北部3省(ホアビン省、ニンビン省、バクザン省)に3か所のパイロット道の駅が設置されました。しかしながら、同国の沿道休憩施設の特徴としてドライブインとしての機能がもっとも重視され、未だ地域振興機能が本格的に実践されるに至っておりません。

またベトナムでは、一村一品運動に関するノウハウを習得するニーズが高まっており、大がかりなセミナーが開催されたり、「ベトナム国農村地域における社会経済開発のための地場産業振興にかかる能力向上プロジェクト」においては一村一品アプローチを導入する動きが見られたりしています。そのような背景の下、本研修は一村一品運動を含むベトナムの道の駅における地域振興機能の強化を目的とし、ベトナム国内で今後普及予定の道の駅の成功例を構築するための支援を目的として実施されることとなりました。

この研修コースでは、毎年10~15名程のベトナムの道の駅関係者が来日し、3週間強中部や九州地域で過ごします。日本滞在中のプログラムは、講義、視察、討論・レポート作成・発表の3つのパートによって構成されています。

講義では、内発的発展論を取り入れた地域振興に係る理論的枠組み及びその日本における実践を学んでもらうため、地方行政、一村一品運動、ガバナンス、道の駅施策、道の駅を通じた地域活性化モデル等の各専門分野において第一人者を講師として招いています。また、ベトナムの道の駅の活性化と、道の駅を中核とした地域振興に欠かせない基礎的知識を身につけるため、ベトナムのマクロ経済(都市・農村格差や貧困問題等含む)、道の駅と地域農業に関する講義もカリキュラムに組み込んでいます。

全体日程の3分の1以上を占める視察も重要なカリキュラム構成要素です。飯田市周辺(長野県)や豊田市(愛知県)においては、中山間地域の道の駅や女性による農産物加工の全国的先駆けである小池手造り農産加工所や大野瀬生活改善グループを訪問します。一方、学校教育や起業を通じての地域振興に力を入れている瀬戸市(愛知県)にも足を伸ばし、行政、商工会議所、小学校関係者から話を聞くと共に、開設間もない道の駅「瀬戸しなの」を訪問することにしています。大分プログラムでは、一村一品運動に係る理論的枠組みとその実践の歴史について学ぶと共に、地域振興の先駆者として地元で活躍するNPOや、地域おこしの成功事例として全国的に知られる民間

企業体を訪ねます。そして、長崎視察では、日本有数の規模を誇り、全国から観光客が訪れる道の駅「みずなし本陣ふかえ」と、それとは対照的に海を臨む景勝の地にあるものの、これと目立った特色のない道の駅「夕陽が丘そとめ」の2つの道の駅を訪問し、研修員にディスカッションのきっかけを提供しています。

コースの終盤に行うワークショップ(グループ討議)では、研修員に研修全体を通じて学んだ知識や気づきを整理してアウトプットすると共に、ベトナムの各道の駅について優先順位の高いタスクを選定し、そのアクションプランを作成してもらいます。そのアクションプランを発表する会では、地域住民と連携下で進める地域振興の重要性が研修員に概ね理解され、研修員がそれを自国においても可能な限り実践しようと意気込む様子が毎回見てとれます。

当研究科では、この研修を単なる日本からベトナムへの技術・経験の移転とは捉えずに、ベトナムからの研修受け入れを通じた日本国内の地域づくりとの協働作業をする良い機会だと考えています。そのため、総長裁量経費事業「国際開発学の地域活動への適用による地域人材育成支援事業」の支援を受けて瀬戸市ならびに大分県・長崎県の関係者・国際開発研究科学生とともに地域の人材育成にも同時に取り組んできました。本支援活動は、ベトナム研修員側と地元関係者が、異なる視点・異なる事業実践を知ることによって双方向に学び合う場を創出する一助となっていると考えています。瀬戸市から視察に同行した市民からは、「陶磁器制作体験などを瀬戸の市民とともにする機会があると、互いの距離が一層縮まって良い」という示唆がありました。JICA研修事業を一つの契機として、国際協力と日本の地域おこしを結ぶこのような実践活動を、今後も展開していきます。



▲道の駅「瀬戸しなの」の産直売り場を訪問



▲ワークショップの風景。手前一番右の女性がクー団長(2011年度)

## 2011年度 学位授与状況

2011年度に当研究科(GSID)より授与された学位数は以下のとおりです。

課程博士取得者14名。論文博士取得者2名。課程博士取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)7名、国際協力専攻(DICOS)1名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)6名です。

修士学位取得者は59名。取得者を専攻別に見ると、DIDが24名、DICOSが17名、DICOMが18名です。



▲博士学位取得者記念撮影(DID)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲博士学位取得者記念撮影(DICOM)

## 入学状況

### 2012年度 4月 入学状況

#### 1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	29 25 47	13 17 21	10 16 18
国際協力	21 14 40	13 10 25	11 9 21
国際コミュニケーション	18 13 27	15 10 21	14 10 20
合計	68 52 114	41 37 67	35 35 59

※注…赤は女性、青は留学生で内数

#### 2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	5 11 13	4 7 9	3 6 8 4
国際協力	2 5 8	2 4 7	2 4 7 1
国際コミュニケーション	5 3 11	2 1 7	2 1 7 4
合計	12 19 32	8 12 23	7 11 22 9

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

### 2011年度 10月 入学状況

#### 1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	2 6 6	2 6 6	2 6 6
合計	2 6 6	2 6 6	2 6 6

※注…赤は女性、青は留学生で内数

#### 2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	2 3 4	2 2 3	2 2 3 0
国際協力	0 0 2	0 0 2	0 0 2 0
国際コミュニケーション	2 2 2	2 2 2	2 2 2 0
合計	4 5 8	4 4 7	4 4 7 0

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

## 学位取得者のことば

国際開発専攻 修了生 趙 玲

私は、2007年に名古屋大学に入学してから、修士及び博士課程を経て、博士学位を取得するまでの5年間、国際開発研究科で過ごしました。この間には、先生方や研究科の友人に大変お世話になりました。この場をお借りして、厚くお礼を申し上げます。特に恩師である指導教授の大坪滋先生、藤川清史先生、新海尚子先生に心から感謝いたします。

私の博士研究テーマは、中国の出稼ぎ労働者に関する経済及び社会地位というのですが、最新の研究データを獲得するために、私は自ら2回中国での現地調査を行いました。アンケートについての設問方法から、デザインまで、私は何度も先生方に相談し、ご意見をいただきました。データが収集できてからは、統計分析の方法や論文の書き方などについても先生方から熱心にご指導していただきました。先生方の貴重なコメントや沢山のアドバイスが無ければ、私が研究を順調に進めることはできなかったと思います。この5年間の研究の道は、平坦ではなかったと感じていますが、私が悩んだ時、困った時、壁にぶつかった時に、いつも先生方が親切に励ましてくださり、暖かい言葉をいただきました。それにより、自信が高まって、様々な困難を越えて、最後まで頑張って博士論文を完成することができました。このような忘れられない思い出があり、私の心の中は、恩師への感謝の気持ちでいっぱいです。

国際開発研究科で過ごした5年間に、私自身を鍛えることができる多くの機会を与えていただきました。大坪先生ゼミのコーディネーター、研究助手、情報委員会のサポーターを担任させていただくことで、コミュニケーション力、協力して物事を進める力、組織的に活動する力などの能力が高まったと感じています。そして、学部生に対して授業をすることで、先生としての責任感が生まれ、授業の仕方がとても大事だということを実感しました。これらの経験は今後の人生に大変役に立つことと思います。

先生方から専門知識や学術の研究方法も教わりましたが、私にとって最も貴重だったものは、事業に執拗に追求する精神、仕事への真剣さと情熱さ、学生に対する高度な責任感、生き生きとした授業雰囲気への教え方です。まもなく、私の幼い時からの夢が実現されて、中国の大学の先生になれるかもしれません。その機会が来たら、私はぜひ、国際開発研究科で学んだ知識や、日本で得た経験などを自分の生徒たちに伝授しようと思います。「勇気ある知識人」を心に銘じて、新たな一歩を踏み出そうと決心しています。



国際コミュニケーション専攻 修了生 野口 朋香

私がGSIDの博士課程後期に入学したのは2005年4月で、それからの休学期間を含めた7年間は、私にとって今後の研究活動の基盤となる貴重な経験と財産になりました。これもひとえに指導教官をお引き受け下さいました木下徹先生、山下淳子先生、そして教育発達科学研究科の高井次郎先生の的確な助言とご指導のお陰であると、深く感謝しております。心よりお礼申し上げます。

入学前から私が興味を持っていたテーマは、今後発展し変化し続けるであろうICTを、日本の英語教育に効果的に活用する可能性について、学習者の情意面から研究することでした。しかし、入学当初は、ICTを利用した外国語教育の効果や可能性を学習者の情意面の変化と関連づけて考察している論文がそれほど多くなく、具体的な研究方法を模索することにかかなりの時間を費やすことになりました。その過程で、「果たして博論に値するしっかりとしたりサーチデザインを構築することができるだろうか」と不安になり、修士論文と博士論文の違いを思い知らされました。また、仕事と両立させながらの博論執筆でしたので、研究のためのまとまった時間がなかなかとれないという焦りや、それを論文執筆が進まない言い訳にしているのではないかという懸念が頭から離れないこともありましたが、しかし、

具体的な研究課題や方法が絞られるにつれ、自らの探究心が刺激され、研究に対する意欲を高めることができました。そして、予め執筆スケジュールを立て、限りある時間を有効に使うことを心掛けることで、論文を完成させることができました。今回の経験から、論文を執筆するために必要な要素として、研究に対するあくなき探究心と、タイムマネジメントの重要性を再認識しました。また、研究を進めていくなかで、多角的な観点から助言を下され、時には励まして下さる先生方や、研究に快く協力して下さる方々の優しさや温かさを感じ、その多くの方々のご厚意があったからこそ、論文を完成することが出来たのだと実感しています。

博士号を取得したことは、確かに私の中での大きな自信となりましたが、研究者としては、これでようやくスタートラインに立つ権利を得ることができたのだと考えています。今後は、GSIDの諸先生方から学んだ研究に対する真摯な姿勢や情熱を忘れることなく、研究者としての新たな第一歩を踏み出していきたいと考えています。



## JDSプログラム

### JDSプログラム カンボジア

#### 持続的な成長と安定した社会の実現／経済・産業振興

教授 藤川 清史

人材育成支援無償事業は、英語名“Japanese Grant Aid for Human Resource Development Scholarship”の頭文字を(飛び飛びに)とったJDSの愛称で呼ばれています。JDS奨学金は当初(1999年)は外務省の無償資金協力として導入されましたが、JICAの組織替え(2008年)の際にJICAに移管されました。GSIDもそれを機会にJDSに応募するようになりました。経済プログラムが受託しているカンボジアの「経済・産業振興」コースはGSID最初のJDS受託です。この制度は10月始まりが対象なので、経済プログラムにとってはやや難しいのですが、夏休みに補講

を行うなどして対応しています。

JDS奨学生の選抜は書類審査と現地面接の2段階で行われるため、経済プログラムの教員は毎年プノンペンに出かけます。JDS奨学生への応募者は若手の行政官が中心です。経済プログラムはアジア開発銀行の行政官公共政策研修も受託しているのですが、こちらは幹部行政官が対象です。経済プログラムは、カンボジア政府では幅広く顔の売れた存在になっています。

### Experience in GSID

Khay Thidaromduol

I joined the Graduate School of International Development (GSID), Nagoya University in 2010. With my 2 years in GSID, I have gained many experiences that I would not have found elsewhere. The school does not teach us to follow the books, but to think and analyze the situation and make our own judgments with justification. For instance, when issues of development are discussed, there is no one correct answer as to what one country should do in order to push and accelerate its development. Students will be given a chance to express their ideas and apply their knowledge. There is another great aspect of the GSID curriculum: Overseas Fieldwork (OFW) and Domestic Fieldwork (DFW). I had joined OFW, I would say it was the most memorable time that I have ever had. I applied what I had studied in the class on the fieldwork. Comparing other developing countries to my own and to developed nations, there are various stages that each country will pass through in economic development. Finally, I would like to thank all the professors for their hard working and effort in passing down their knowledge to us.

### Student Life in Nagoya University

Um Youthy

I am a JDS student (2011-2013) from Cambodia. This is my second semester at the Graduate School of International Development (GSID).

At school, I have a chance to meet different students from various countries, cultures and backgrounds. We can share our respective ways of living, knowledge and research topics with each other. Furthermore, the school provides many facilities to students, which is different from the study system in my country.

Outside the campus, I am also invited to participate in other activities arranged by the school such as conferences and study visits to different organizations in Japan. Beside academic life, the school also provides various sport facilities. Playing football is my favorite weekly sporting.

At the beginning, I felt everything was new because I graduated from university about ten years ago, after which I started working, and I had never live alone. In particular I did not know how to cook and I do not speak any Japanese, which made it difficult for me. But now thanks to the support of my academic supervisor, tutor, Cambodian friends, CSAN and JICE, I have become used to and enjoy the way of life here.

### JDSプログラム フィリピン

#### 行政機関の能力強化／生計向上のための農業・農村開発・零細中小企業支援

教授 宇佐見 晃一

農村・地域開発プログラムはJDSに参加し、フィリピン国の「生計向上のための農業・農村開発／零細中小企業支援」という分野での行政機関の能力強化を目標において、平成23年度から平成26年度まで毎年3名の留学生を受け入れています。私達は、この目標を尊重し、従来の陥りがちな「中央省庁優先」ではなく、地方出先機関や地方自治体の「能力強化」機会を考慮して「書類審査」「現地面接」という選考過程に関わっています。この留学生受入プログラムの特徴は大学卒業後、

開発現場で10年間以上奮闘した経験を持つ行政官等が本研究科修士課程で専門知識だけでなく研究力・実践力を習得することです。選考された留学生が30代後半(中堅層、現場の熟知者)であるという心配・不安は、追加的セミナー・講義、研究補助、資料整備等を内容とする特別プログラムという手厚い留学生支援によって軽減できるように努めています。

### Academic and Field Exposure Trips for JDS students in Rural Development Lagare Bimbo

Who says it's boring at GSID? Well, students enrolled in Rural and Regional Development Program are not confined to their study rooms. Standing by the concept of learning from the field, its curriculum includes student trips both to academic

conferences and rural field situations.

In October 2011, Professor Koichi Usami led a group of students in joining the 61st Annual Meeting of Regional Agriculture and Forestry Economics held at Ehime University,

Matsuyama City. In two separate sessions, two doctoral students made presentations and received valuable feedback on their research. The accompanying master students also noted the comments of academic experts while orienting themselves of the studies from other participating institutions. Also, from January 27-29, 2012, students with Professors Yoshiaki Nishikawa and Usami visited the Environment Model City of Minimata in Kumamoto Prefecture. The trip gave the students valuable insights to the endogenous recovery of the once devastated community. Escorted by Mr. Toru Sawahata,

manager of the Minamata City Kugino Community Center Airinkan, the group went to the Minimata Disease Municipal Museum and also visited the terraced paddy fields and forest conservation projects of Airinkan.

photo:in Kugino Community with Mr.Sawahata.



## Rural and Regional Development Seminar: A Good Training Ground and Learning Experience

Peji Brenalyn • Lenard Guevarra

Managed by Professors Yoshiaki Nishikawa and Koichi Usami, the DID-Rural and Regional Development Seminar enables the students to acquire fundamental research abilities through intensive discussions on research methodologies, techniques, and conceptual and practical tools to write a research proposal and Master's thesis. At Seminar 1, discussions on how to clarify the research objectives and questions, constructing the research framework, and definition of the theoretical concepts help the students write a research proposal that adheres to the academic tradition of GSID. At Seminar II, the students make regular presentations of their studies related to various development issues and problems. The seminar classes serve as both a training ground and a good learning experience for the students. Every meeting

is a learning experience on different perspectives from sociology, anthropology and development economics, among others. The students recognize the importance of integration and collaboration of various disciplines as a way to gain a deeper understanding of the major problems in development such as poverty and inequality which are multi-dimensional. Having a mixture of students from various fields and nationalities enhances the discussions in the seminar since every student brings with him or her a wealth of experience from their own country and a balanced understanding of the multidisciplinary approach to advancing, understanding and assisting in the formulation and evaluation of, rural and regional development policies and programs.

## GSID教員の最新紹介

### 『生物多様性を育む食と農』

コモンズ (2012年3月刊行)

西川 芳昭 (編著)

国連食糧農業機関 (FAO) は、農業の近代化・市場化に伴う食糧と農業を支える作物の多様な品種の急速な消滅に警告を発している。作物品種の多様性は将来の品種改良の素材としての資源の価値を持つとともに、多くの途上国や先進国の条件不利地においては地域に適応した農業投入財であり、伝統的に栽培されてきた品種及びその栽培に関する知識が消滅することは、地域および地球上の農業の両方にとって重大な危機である。三井物産環境基金の助成を受けて実施された研究の成果をまとめた本書では、国際条約を中心としたグローバルな枠組みの中で、グローバル・リージョナル・ローカルなレ

ベルで農民や消費者などの地域アクターが多様性を守り育む管理にどうかかわれるかを分析している。GSIDからは、経済評価について藤川教授・事例としてのサゴヤシを西村名誉教授・ブルキナファソの農家戦略を西川と小谷 (前期修了現FASID) ら・国際組織と農家の実態を結ぶエチオピアNGOを福田学振研究員・ネパールの参加型育種を鄭 (前期学生) が執筆している。多様なステークホルダーの関与及びそれらをつなぐ媒介者の役割の重要性を結論で言及している。



### 『国境をこえた地域づくり』

新評論 (2012年3月刊行)

西川芳昭・木全洋一郎・辰己加寿子 (編著)

地域づくりと国際協力の新しい指針を提言した国際開発学会「国際協力と地域振興部会」の成果報告出版である。

本書で紹介される滋賀県甲良【こうら】町、山口県阿武【あぶ】町、長崎県小値賀【おぢか】町、群馬県甘楽【かんら】町は、途上国からの研修員を受け入れている。途上国と日本の地方は置かれた基礎的条件は違うが、グローバルな構造の中における「辺境」という状況を共有しており、「外発的なものに疲弊した当事者」同士だからこそ分かち

合える価値がある。地域で当たり前の暮らしを続けていくためにもグローバルにつながる事が不可欠であろう。本書で紹介される「グローバルな絆」―地域を軸とした途上国との新しい国際協力・国際協働のあり方―は、まさにその生きた実例といえる。地域づくりと国際協力の新しい指針が提示されている。



## 公開講座

## 「世界の中のラテンアメリカ音楽 —国際化する音楽の諸相」について

准教授 西村 秀人

2011年6月の木・金曜日、計4回で公開講座「世界の中のラテンアメリカ音楽」を行った。講演者は全4回とも西村が担当し、第2回(6月10日)のみ現代タンゴの巨匠アストル・ピアソラのグループで約10年間ともに演奏、現在アメリカを中心に活動を続けるピアニスト、パブロ・シーグレル氏に登場していただき、タンゴとピアソラの音楽の国際化について西村との対談形式で講演を行った。2011年はアストル・ピアソラの生誕90周年にあたっており、コンサートのため来日していたシーグレル氏を特別に講座に招いたものであった。(なお本2012年はピアソラ没後20周年であり、7月にシーグレル氏は再来日、東京で記念コンサートを行う予定である)。

その他第1回では1910年代のタンゴ流行に始まり、1930年代のルンバ、1950年代のマンボやチャチャチャ、1960年代のボサノヴァまで続くラテンアメリカ音楽の欧米への浸透について扱った。第3回では欧米経由で日本に紹介され、より本格化を目指す方向と日本化を指向していく2方向で展開していった日本におけるラテンアメリカ音楽の特色を中心に考察した。第4回はロックの流行によって世界の音楽業界が大きな変化を迎えて以降、国際的なマーケットに登場しなくなったラテンアメリカ音楽が、むしろ地域内部での国際化を進めていった点を考察、さら

に1990年代のワールドミュージック・ブームの影響、そしてグローバリゼーション下で音楽に生じた変化を考察した。全4回はおおまかに歴史の流れに沿っており、約100年の変化を音源と映像をまじえながら解説したことになる。

また第4回には飛び入りという形で、本学卒業生のフラメンコ・ギタリストで、現在ベネズエラ音楽を中心に演奏している出口泰司氏(クアトロ)と岡野友絵氏(ベース)による「セレステ」が演奏を披露、西村も打楽器で参加し、ラテンアメリカの名曲を演奏した。

さまざまな条件の制約から、今回は有料とせざるを得なかったが、金額設定も規定があるため自由にならず、結果として参加者が1ヶ台にとどまったのは残念なことであった(ゲストを招いた第2回はGSID関係者のみ自由参加とした)。2010年に同じく西村が構成した公開講座「アルゼンチン音楽にみる文化変容のダイナミズム」は無料で行ったが、その際のべ60名以上の参加者があったことを考えると、社会貢献という点では出来る限り無料で実施する体制を整えるべきだったと反省している。



## 「グローバル化時代の国際協力」を振り返って

教授 高橋 公明

公開講座『グローバル化時代の国際協力』と銘打って、2011年10月11日から12月6日までの毎週火曜日に、8階のオーディトリウムにおいて合計9回実施した。開講時間も、仕事終わりの方が出席可能と思われる午後6時30分から午後8時までとし、学生でも無理なく参加できるように受講料は無料とした。また、テーマが示すように、あまり体系的であるとか、それぞれのお話が緊密につながっているとか、というようなことは意識せず、講師がこのテーマの中で自由に話題を選べることを重視した。それに対応するように、受講登録については、とくに締め切りは設定せず、極端に言えば1回だけの受講も可能にした。

講師陣の構成は8名が国際協力専攻の教員で、外部からの招聘は1名だけであった。なお、国際協力専攻で講師とならなかった1名は、この小文の執筆者で、公開講座の世話人となった。テーマ性が薄く、受講者が集まらないのではないかとという悲観的な予想もあったが、総登録者数は62名となり、各回の平均出席者数は28名で、量的には杞憂であった。また、90分のうち30分程度は質疑の時間を設定することとしたが、シーンとするようなことは皆無で、毎回、熱心な受講者から鋭い質問や興味深いコメントが寄せられていた。

以下は各回のタイトルと講師の名前である。

10月11日: 国際協力と国際開発 - その歴史と現代 - 木村宏恒

10月18日: 国際協力の新しい担い手 - ソーシャル・ビジネス - 伊東早苗

10月25日: 発展途上国の病院運営管理 - 南米ガイアナでの国際協力: 中村真規子(太成学院大学)

11月1日: WTO体制下の貿易分野での国際協力: 川島富士雄

11月8日: 1990年以降の国際社会の変容と国際連合安全保障理事会: 山形英郎

11月15日: 国際協力の新たな側面 - 武力紛争への挑戦 - 西川由紀子

11月22日: インドネシアにおける震災対策: 島田弦

11月29日: 国際労働力移動(移民)から見る送出国と受入国の関係: 東村岳史

12月6日: IT教材と一緒に作って国際協力してみよう: 大橋厚子

この講座についてアンケートをお願いし、18通の有効回答を得た。質問1「この講座は何で知りましたか」に対して、16名がインターネットと回答している。ウェブサイトの充実が今後も有効であることを示している。質問2の(1)「今回の講座はいかがでしたか」に対して、大変良かった7名、良かった7名と回答しており、まずまずの評価である。(2)「講座はわかりやすい内容でしたか」に対して、わかりやすかった13名、普通4名で、これも講師陣の努力の賜物であろう。また、個別のコメントでも好意的なものも多く、各講師の提供する話題に深い関心を寄せたことが示されている。



## 客員研究員の紹介

### 国内客員研究員

矢倉研二郎(阪南大学経済学部・准教授)

研究課題: カンボジア農村経済・農家経済に関する研究

期 間: 平成24年5月～平成24年7月

小林 知(京都大学東南アジア研究センター・准教授)

研究課題: カンボジア農村社会における生業基盤の変容

期 間: 平成24年4月～平成24年7月

須田 敏彦(大東文化大学国際関係学部・准教授)

研究課題: 南アジアの農村における出稼ぎとマイクロファイナンスの関係

期 間: 平成24年4月～平成24年6月

森川 幸一(専修大学法学部・教授)

研究課題: 国際刑事裁判所(ICC)による侵略犯罪の処罰と

国連安全保障理事会の権限

期 間: 平成25年1月～平成25年3月

豊田 昌倫(関西外国語大学外国語学部・教授、京都大学名誉教授)

研究課題: 現代英語のスタイル

期 間: 平成24年10月～平成24年12月

佐野真一郎(国際基督教大学教養学部・客員准教授)

研究課題: コーパスを活用した言語変化の研究

期 間: 平成24年6月～平成24年8月

日下 渉(京都大学人文科学研究所・助教)

研究課題: フィリピン民主主義における差異と共同性

期 間: 平成24年7月～平成24年9月

## 外国人客員研究員

李 毅 (西南財経大学法学院・副教授)

研究課題: 中日独占禁止法における違法カルテルの認定に関する比較研究  
—行政上及び司法上の救済の両面から—

期 間: 平成24年4月2日～平成24年6月30日

Joe Devine (パース大学社会政策科学部・講師)

研究課題: 人間の福祉・不平等・貧困

期 間: 平成24年7月2日～平成24年9月7日

Edward Nyagaka Omari MOGIRE (ロンドン・キングストン大学・講師)

研究課題: アフリカの角における安全保障の輪郭  
—非伝統的安全保障の統治—

期 間: 平成24年9月18日～平成24年12月15日

Seak Sophat

(王立ブノンペン大学理工学部環境科学科・上級講師・副学科長)

研究課題: カンボジアにおける天然資源管理

期 間: 平成24年5月1日～平成24年8月15日

趙 彦民 (山東大学歴史文化学院・准教授)

研究課題: 地域社会における民俗芸能の機能と伝承

期 間: 平成24年10月1日～平成24年12月28日

甲田 慶子 (米国カーネギーメロン大学現代言語学部・教授)

研究課題: 第二言語リテラシーの習得

期 間: 平成25年1月1日～平成25年3月31日

## スタッフの人事異動

## 教 員

■平成24年3月31日 退職

国際開発専攻 教授 長田 博 (帝京大学経済学部・教授へ)

国際協力専攻 教授 木村 宏恒

国際コミュニケーション専攻 教授 二村 久則

国際協力専攻 助教 東江 日出郎

## 事 務

■平成24年4月1日 転出

総務G 村瀬 益子 (国際部国際企画課へ)

教務G 森 征一郎 (学務部学務企画課へ)

図書G 端場 純子 (情報推進部情報推進課へ)

■平成24年4月1日 転入

総務G 川原 弘美 (工学部・工学研究科総務課から)

教務G 中野 善之 (医学部・医学系研究科学務課から)

図書G 菊池有里子 (理学部・理学研究科・多元数理科学研究科図書掛から)

## 協力教員の交代

## 教育発展史講座

旧: 寺田 盛紀 (大学院教育発達科学研究科)

新: 渡邊 雅子 (同上)

## 比較国際法政システム講座

旧: 横溝 大 (大学院法学研究科)

新: 田村 哲樹 (同上)

旧: 稲葉 一将 (大学院法学研究科)

新: 水島 朋則 (同上)

## 国際文化協力講座

旧: 藤木 秀朗 (大学院文学研究科)

新: 宮地 朝子 (同上)

旧: 大石 和欣 (大学院文学研究科)

新: 東 賢太郎 (同上)

## 出版物紹介

2011年度には、『国際開発研究フォーラム』41、42号が発行されました。次号43号は2012年内の発行を予定しております。

『国際開発研究フォーラム』掲載論文は、下記URLアドレスより全文閲覧できます(21号以降)。

<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/bpub/research/public/forum/index.html>Information  
お知らせ

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

## オープンキャンパス 2012 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2012」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

日時 平成24年7月14日(土)

会場 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)  
地図はホームページを参照ください。  
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

## 内容 プログラム

- |                                  |                                  |
|----------------------------------|----------------------------------|
| (1) 留学生相談 11:00～14:00            | (5) 全体説明会 14:00～14:50            |
| (2) 施設見学                         | ●専攻及び教育プログラムの特徴 ●GSIDの入学生の構成、就職先 |
| ●図書室 11:00-13:00・14:00-16:00     | ●入学試験の説明 ●公開講座の案内 など             |
| ●言語情報処理室(コンピュータールーム) 13:00～14:00 | (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00      |
| (3) 導入部 スライド上映 13:00～13:15       | ●各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)            |
| (4) 院生によるGSID紹介 13:15～13:45      | ●個別相談(教員と院生が対応)                  |
| 海外実地研修・国内実地研修画像放映、院生による          | (7) 展示 11:00～16:00               |
| 特色ある社会貢献活動を含む                    | 海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など          |

お問い合わせ先 / [opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp](mailto:opencampus@gsid.nagoya-u.ac.jp)